鎌倉最古の仏教寺院「千葉地廃寺」
―調査・研究の現在地と課題―

押木 弘己

はじめに

令和５年１月１日現在、鎌倉市域の仏教系寺院は 120 に上るという（神奈川県ＨＰ「神奈川県知事所轄の宗教法人」より）。また、昭和 55 年（1980）刊行の『鎌倉廃寺事典』に所載された寺社は数多あるが、そこに掲載されない、名も知れぬ古代寺院がかつて鎌倉に存在した。瓦など考古資料の出土地である御成町の字名を取って「千葉地廃寺」と通称され、その創建は律令制成立期の７世紀後半頃と推定されている。現在も残る長谷寺は、天平十一年（736）の創建と寺伝は述べるから、「千葉地廃寺」はそれよりも遡る、鎌倉で最も古く創建された仏教寺院と考えて誤りないだろう。ただし、推定地周辺における発掘調査の件数は決して多いとは言えず、また分厚い中世層を取り去った下位に古代層が眠っているため、狭小面積の発掘調査ではそこまで到達できないケースも多い。存在は確実視されながらも、現時点では謎深き寺院と言え、県内の他の古代寺院跡と比べても調査・研究は大きく立ち遅れている。

そこで本稿では、現在までに得られた考古学成果を基に「千葉地廃寺」について研究の現状を整理し、他地域の同時代例も参照しながら課題と展望を見出したい。

１．寺名について―「千葉地廃寺」の再提唱―

前章で述べたように「千葉地廃寺」は遺跡地周辺の小字名を冠した研究上の造語で、現状、存立時の名称に関する情報は一切ない。かつて「千葉地遺跡」や「千葉地東遺跡」の名で発掘調査が実施され、同名の調査報告書も刊行されているが、のちに市内遺跡の台帳登録名が確定され、前者は今小路西遺跡、後者は若宮大路周辺遺跡群の範囲内に包括されることとなった。

「千葉地廃寺」の主要部分は瓦の出土量や古代遺構の遺存状態から今小路西遺跡にあったと考えられるが、この名称が何時、どのようなタイミングで使用され始めたのかは定かでない。「鎌倉廃寺」を利用する研究者もいるが、鎌倉に廃寺が数多あることは先述のとおりなので、「千葉地廃寺」の方が対象を限定できるため妥当と考える。神奈川県下での同時代例として、茅ヶ崎市の「下寺尾廃寺」や小田原市の「千代廃寺」も現存地名を冠しており一定の市民権も得ている。「千葉地廃寺」は市民権とまで行かないまでも、県内の古代史研究者間では、この名称で意思疎通を図ることが可能である。近年の展示図録でも採用されており[大澤 2021]、この際、御成町当地の古代寺院跡について「千葉地廃寺」と通称することを再提唱し、用法の初見については追究を続けることにしたい。

なお、県下では国分寺以前の初期寺院として、上掲の下寺尾・千代廃寺のほかに深田廃寺・宗元寺・影向寺などが考古資料の存在から知られている。宗元寺は『吾妻鏡』に見え、現在の

横須賀市曹源寺の境内一帯に、影向寺も現存する同名寺院の境内に存在したことが推定されているが、この名称が創建当初まで遡及するものか、確固たる情報はない。

ただ、県外に視野を広げると、古代の寺院遺跡とその周辺では木簡や墨書土器、ヘラ書きの文字瓦など出土文字資料によって往時の寺名を知り得る場合がある。群馬県前橋市山王廃寺跡では「放光寺」のヘラ書きがある文字瓦が出土しているが、これは天武天皇十年（681）建立の高崎市『山上碑』や長元三年（1030）に記された『上野国交替実録帳』に登場する寺名で、文献や金石文の記録と出土文字資料とが合致する希少な事例といえる。また、茨城県水戸市の台渡里廃寺跡では「徳輪寺」や「仲寺」銘の文字瓦が出土し、後者は常陸国における当地周辺の郡名「那賀」を表している可能性がある。このように史料や出土文字資料から郡名を寺名としていたと推測できる例は多く（郡名寺院）、遺存地名や出土文字資料から、在地では「大寺」として通用していた例があることも指摘されている。「千葉地廃寺」についても、将来的には出土文字資料によって存立当時の寺名を知り得る可能性があり、その日を待ちたい。

２．創建時期について

創建期は７世紀後半まで遡り、第４四半期～８世紀第１四半期とする見方が無難なところであろう［河野 1997］。これは、今小路西遺跡（御成小学校地点）で検出された鎌倉郡衙第Ⅰ期遺構群の８世紀前半を遡る年代観であるが、現今の研究水準では郡衙設置と概ね同時期の創建を考えるのが一般的であり、両年代観の比較・検討が先ずもって求められる課題である。

出土瓦の分析により、宗元寺や下寺尾廃寺より後発するという見方もあるが、これには発掘調査の実施件数や、それにともなう資料の蓄積度も関係していると思われる。「千葉地遺跡」や「千葉地東遺跡」の成果に基づいた先駆的研究以降、「千葉地廃寺」の解明に資する資料は飛躍的に増加したものの、これらを対象とした新たな検討はほぼ皆無という状況が続いた結果、鎌倉外部からの視点で比較検討が進まなかったことも、こうした創建年代のズレを生じさせた要因と考えられる。多少の先後関係は認めつつ、どこまで隔たりがあるのかについては現時点の考古資料に即した検討が必要であろう。

『日本書紀』天武十四年（685）三月壬申条は、「壬申、詔、諸国毎家、作仏舎、乃置仏像及経、以礼拝供養」と記す。「家」＝郡家（郡衙）と解して、郡衙に付属または隣接する寺院の建立奨励策と理解されている。『扶桑略記』持統六年（692）九月条は「天下諸寺凡五百四十五寺」にまで増加したことを伝え、全国の「郡」（７世紀当時は「評」）設置数と同程度になったことが指摘されている。「千葉地廃寺」の創建も、概ねこの前後に置くことができるだろう。

３．造営主体について

初期寺院の造営主体者としては、首長クラスの在地豪族が有力視され、郡司長官の大領などを輩出した氏族が中心となったと考えられている。鎌倉郡では、天平勝宝元年（749）記銘の『正倉院御物古裂（調庸布）』に「郡司少領」として「他田臣国足」が、天平勝宝八歳（756）

の『相模国朝集使解』に「郡司代」として「君子伊勢万呂」の名が見える。これら他田・君子といった郡司氏族が造営に関与した可能性が考えられる。

一方、「郡衙周辺寺院」については官寺（準官寺）・氏寺（家寺）・知識寺などの諸説があり［山中 2005］、造営者の関わり度合いによって多様性のある存在であったことも想定できる。

官寺説は８世紀以降の国分寺に近い性格を求め、郡衙に付属する官寺（郡寺）という理解で、「郡名寺院」や郡の「大寺」として国家的仏教行事の末端を担いつつ官費で経営・維持される存在と考える。

氏寺説は郡司などの在地の有力氏族が造営主体となり、彼らの祖先信仰に基づく祭祀に仏教の要素を取り入れることで、領域支配を信仰・イデオロギー面で支える存在になったと考える。その意味では、前代までの祖先祭祀の舞台装置となった古墳に置き換わる施設と見なせよう。氏族私有の財産や人民を用いて造営したとする理解は、上述した天武十四年紀における「毎家」を、郡家（郡衙）ごとではなく氏族の家ごと、とする解釈に通じる。大領以下の郡司層が造営主体であった場合、律令制に基づく地方官人と伝統的在地首長という二面性を、どの程度まで分離できたのか、といった疑問が生じる。実際には氏族の私財で建立した「氏寺」であっても、国家的仏事を担うなど一定の公的性格を有したとする見方もあり、それが郡制下の定額寺制度に繋がったとの理解もある［荒井 2017］。

知識寺説は複数の在地氏族によって造営と維持・管理が担われ、諸氏族に解放された寺院とする考えに立つ。在地社会において突出した有力氏族がいない場合などは、諸氏族が連帯して造営ほかの寺院運営に関与したとし、古墳時代において首長墓系列が不明確な鎌倉エリアでは、比較的理解がしやすい説明となっている。

「千葉地廃寺」の造営主体者がいずれの所説に該当するのか、現時点ではそこに導くだけの資料蓄積・研究水準には到底およんでいない。しかし、そうした視点を持ちながら考古資料に向き合うことは、鎌倉地域の古代社会を全般的に考察するためにも必要な作業となろう。

４．機能・活動

前章で述べたように、郡領クラスをはじめ造営氏族による祖先祭祀に仏教を取り込むことで、初期寺院は在地の領域支配を信仰面で強化する役割を担ったとされる。古墳に置き換わる格好で在地支配の正当性を誇示するための舞台となり、７世紀代の後葉、全国で瞬く間に広がりを見せたことは史料の記述とも合致する。古墳に替わる点、瓦で荘厳された建物という視覚的な象徴性に加え、畿内王権（律令政府）との強い結び付きを背景に誇示することが、在地支配にとって極めて重い意味をもったと想像されよう。造寺や経営に必要となる技術・知識の導入には王権（または中央の有力氏族）側から一定の支援があったことが想定でき、受容する在地側は対価として諸種の貢納・奉仕活動を提供した。中央集権的な律令国家への変革が進む中でも、守旧的な氏族制度による地方支配も温存されることで、初期寺院は機能したと考えられる。

具体的な活動内容について、『日本霊異記』などから追善供養や悔過に関する私的な法会が

催されていたと推察でき、8世紀中葉以降の国分寺に課された、国家の鎮護という公的役割は持たなかったと理解されている［三舟 2020］。

5．調査・研究史

平成12年（2000）、岡本孝之氏による「神奈川県古代瓦出土遺跡目録」で網羅的集成が発表され、鎌倉市についても文献一覧が提示された（岡本編 2000）。そこに掲げられた文献を参照しながら、「千葉地廃寺」に関する調査・研究史を略記することにしたい。

昭和14年（1939）12月10日、赤星直忠氏らの市内巡検の際、「無量寺阯である岩崎男邸あとの分譲地」で奈良時代の所産と思しき布目瓦が採集されている。この時、巡検参加者の間で「此処にこんなのが沢山出るとすれば一問題起きますね」との会話が交わされている［沢編 1972］。「岩崎男邸あと」とは無量寺ヶ谷にあった岩崎小弥太の別邸跡地のことで、現在の鎌倉歴史文化交流館などを含む広大な敷地を有していたという。ただ、昭和14年当時の「分譲地」が具体的に何処であったのか、今のところ特定には至っていない。残念なことに、この時には「一問題起き」る状況には至らず、この後、当地に布目の古代瓦が埋蔵されていることが広く周知されるには、高度経済成長期の開発増加にともなう発掘調査を待たねばならなかった。

昭和55年（1980）、「千葉地遺跡」（＝今小路西遺跡・紀ノ国屋地点）で各種の古代瓦が出土し、ここから本格的な考古学的検討が開始されることになる［千葉地遺跡発掘調査団 1982］。この調査では地山と推測される第5面においても古代の遺構は検出されず、さらに下層に遺存している可能性も推測できる。中世に属する各層から15箱分の瓦が出土したとされ、この中に一定量の古代瓦も含まれている。報告書では原廣志氏によって丸瓦・平瓦などの種別ごとに製作技法に基づいた分類がなされ、30年以上が経過し、資料蓄積が進んだ現在でも分類基準たり得る内容となっている。

昭和59年（1984）、「千葉地東遺跡」（若宮大路周辺遺跡群・現神奈川県水道営業所地点）で北東～南西に流れる中世河川跡の埋土から古代瓦が出土した（神奈川県立埋蔵文化財センター 1986）。報告書刊行後、製作技法や胎土などに基づく分類が示されたが［國平・河野 1988］、原氏の千葉地分類を継承しない独自の内容となっており、また「古代末期から中世」の所産として凸面綾杉文タタキの古代瓦が対象外とされるなど、現在の視点からは資料抽出が不十分という印象が拭えない。この論考では軒丸瓦の小片を「三重圏素弁六葉蓮華文」に復元し、未だ系譜などの評価に定見は得ていないものの、近年では「山田寺式に類する」という指摘も提出されている［高橋 2019］。軒丸瓦は、「千葉地遺跡」でも、中世層からではあるが小片1点が出土しており、やはり素弁蓮華文と見なせる。これまで顧みられる機会の少なかった資料だが、両者を実物同士つき合わせて観察する作業は、瓦自体の系譜だけでなく、創建年代を絞り込むためにも最優先で行うべきである。同遺跡からは畿内系とされる暗文土師器の出土も目立ち、7世紀第4四半期～8世紀第1四半期という創建年代の根拠とされた（A期）。また、それに後出するB期の瓦は8世紀第2四半期の後半という、相模国分寺の創建期瓦と同様の作り方と

認識されている。土師器と同様、瓦も型式の検討による所見であるが、相模の廃寺跡や瓦窯跡（推定地を含む）出土資料との比較から、主たる生産地が三浦半島に所在したことを明らかにした点、現在においても重要な提言である。

昭和 60 年（1985）年からの今小路西遺跡（御成小学校地点）の調査において、最下層から古代の鎌倉郡衙と目される大型遺構群が発見された。ここでは天平五年（733）の紀年銘木簡が出土して衆目を集めたが、少量であるが古代瓦も出土している［今小路西遺跡発掘調査団編 1990］。古代Ⅰ・Ⅱ期では郡衙政庁と思しき「ロ」字型配置の掘立柱建物群が検出され、瓦はⅠ期遺構での出土は皆無で、Ⅱ期南辺中央建物（門か）の柱穴から凸面斜格子タタキの平瓦片が出土している。千葉地分類の斜格子 a 類に近似し、遺構間の新旧関係を加味した検討により、郡衙の造営・展開と「千葉地廃寺」創建との相関を考えさせる貴重な資料である。ただ、Ⅰ期は上述した天平五年銘木簡を根拠に８世紀前半の年代観が付与され、それとの関係から、Ⅱ期には８世紀後半の年代が考えられている。ただ、木簡の出土遺構が必ずしもⅠ期に属するとは断定できないことを報告書は述べているし、この点、かつて筆者も捨象してはならないと言及したことがある［押木 2020］。いま一度、木簡だけには引きずられない、土器や瓦の型式学的検討を行った上で、県内他例の研究成果も参照しながらⅠ・Ⅱ期の年代観を再構築する必要があるだろう。なお、同地点では古代の遺物包含層および中世層からも一定量の古代瓦片が出土しているが、郡衙施設が瓦葺きであったことを示すほどの量とはなっていない。今のところ、近接する寺院からもたらされたと理解するのが妥当であろう。

1990 年代に入ると、「千葉地廃寺」推定地から南に 1 km ほど離れた由比ガ浜の海岸砂丘上で竪穴住居址を主体とする古代の集落跡が相次いで発見されたことにともない、同時期の瓦片も一定程度まとまった量が出土している。千葉地一帯でも事例の少ない、完形に近い資料も含まれてはいるものの、立地条件や検出遺構の様相からは伽藍の展開は想定しがたい。集落に付属する仏堂があったとも考えにくい状況だが、可能性は捨て切れない。遺跡の環境を踏まえれば、海上輸送にともなう陸揚げ地、または風待ち港といった性格ならば理解しやすい。

平成 9 年（1997）に刊行された由比ガ浜中世集団墓地遺跡（若宮荘地点）の報告書において、鎌倉市内における古代瓦の出土遺跡がまとめられ、併せて平瓦凸面のタタキ文様を基準として國平・河野氏による千葉地東分類との対照関係が示された。それを踏まえ、同地点出土の古代平瓦を 10 類型に整理している。刊行時点までの、鎌倉における古代寺院の研究史をまとめた成果として評価できる［小林 1997］。同年、関東古瓦研究会シンポジウム『関東の初期寺院』が開催され、千葉地東分類に基づく説明がなされている［河野 1997］。

平成 12 年（2000）、考古学講座『かながわの古代寺院』が開催され、翌年には成果集も刊行された。「千葉地廃寺」に関する直接的言及は少ないが、相模国における古代寺院の造営過程で下寺尾廃寺に続く 680 年前後に造営されたものと推定されている［河野 2000・2001］。ただ出土瓦による両廃寺の先後関係について明確な根拠をもって認め得るのか、疑問も残る。講座では県下の古代瓦出土遺跡を悉皆的に提示しており、千葉地については「寺院伝承地」として

いる［岡本編 2000］。ただし、もともと「伝承」が残っていた訳ではないので「寺院推定地」という表現が妥当かと考える。

平成 15 年（2003）、今小路西遺跡の個人住宅建設にともなう発掘調査地で、古代の溝・土坑から、まとまった量の古代瓦が出土している［原ほか 2006］。報告書掲載遺物の大部分を瓦が占めており、中世遺構からの出土遺物にも混在している。これらは残存度の高い資料が目立ち、ほぼ完形の資料も含まれている。伴出する土師器や須恵器が少ないため相対的年代観は把握し難いが、遺構の新旧関係としては最も古い溝 1 から一枚作り・凸面有軸綾杉文タタキの平瓦片が出土している点、「千葉地廃寺」創建よりは後出の要素と見なし得よう。

平成 18 年（2006）、今小路西遺跡のマンション建設地で発掘調査が行われ、一定量の古代瓦が出土している［斉藤建設 2008］。報告書では破片数が提示され、中世 3 面上の遺物包含層で 316 点、中世 4 面上包含層で 1163 点、古代 5 面上包含層では 252 点の瓦片が出土し、5 面上の資料はすべて古代の所産であるという。5 面では 6 時期に亘る古代遺構の変遷が確認され、7 世紀後葉～末とされる古代Ⅲ期では真北軸に近い総柱式の掘立柱建物が並んで検出されている。御成小学校のⅠ期郡衙の年代観に先行するが、この見直しが課題であることは上述したとおりであり、そのための指標となり得る事例と言えよう。8 世紀代とされるⅣ期では、軸線が東に振れた溝持ち側柱式の掘立柱建物へと変化が認められるが、建物の位置はⅢ期から踏襲されている。9 世紀以降のⅤ期では真北軸の掘立柱建物に復しているが、建物位置は移動している。Ⅲ・Ⅳ期の建物群について、郡衙政庁と距離的に隔たる点に加え、柱穴の形態・寸法、柱間距離の規格が統一されていない点、さらに福岡県ヘボノ木遺跡との共通性や『額田寺伽藍並条里図』における建物配置なども参考事例としつつ、2000 点に上る古代瓦の出土を根拠に寺院の正倉であった可能性が指摘されている［大上 2009］。これに対し郡衙の正倉という意見もあるが［鈴木 2018］、特段の根拠は述べられていない。筆者は、これまでの瓦の出土量から推定し得る伽藍中心部の北側、郡衙政庁からはより離れた地点での検出であることを考慮し、大上氏の寺院関連説に説得力があると考える。國平健三氏も、大上氏説を支持する［國平 2010］。

このように、2000 年代に入ってからは出土瓦の生産・使用時期に相当する遺構の検出例が千葉地一帯で漸増し、新たな検討の必要性が生じているのが現在地である。

平成 20 年（2008）には、相模国各地の古代瓦について、蛍光Ｘ線による胎土分析の結果が示された［國平ほか 2008］。千葉地東遺跡の出土品も対象とされ、分類基準は國平・河野氏による成果に基づいている。再三述べているように、千葉地東だけでは対象資料が限定的であり、より伽藍推定地に近い地点の、確実に古代と特定できる遺構からの出土資料を追加して分析を施すべきだろう。なお、この時の分析では、凸面斜格子タタキの平瓦を含む多くが三浦半島の瓦窯産と推定される結果が得られ、1988 年からの見通しが補強されることとなった。

まとめにかえて―課題と展望―

前章までに、「千葉地廃寺」に関する諸属性と、現在までの調査・研究史を概観してきた。

初期寺院の研究は考古資料の蓄積度によって進展に差があり、その点、「千葉地廃寺」は県下の他遺跡と比べて後れを取っている。その反面、発掘調査・研究が進んだ同時代寺院の成果を援用することで、間接的にではあるが実態に迫ることも可能となろう。そのための基礎作業として、現今の資料に基づいて研究課題を整理し、以下に提示する。

出土瓦の分類は原氏による千葉地分類が網羅的で、古代・中世の区別を明確化する必要性はあるものの、資料が増加・蓄積された現在でも通用しよう。追加資料については千葉地分類と突き合わせた上で、諸類型の数量把握と統計学的分析を進める必要がある。

國平・河野氏の千葉地東分類は先行する千葉地分類を踏まえた内容とはならず、対象資料が旧神奈川県立埋蔵文化財センターの所蔵資料に限定された点、研究の端緒段階で混乱を生んでしまった感があり残念である。ただし、胎土分析も含め、相模国の古代寺院全体の中で評価がなされており、こちらも研究の土台として十分な内容を有している。これら両分類を、今日の研究水準に即して統合・再構築することが、何より優先して取り組むべき課題である。

御成小学校地点で検出された郡衙遺構も含め、字「千葉地」一帯では厚い中世層の下に古代の遺構群が広く遺存していることは明白である。現状、個人住宅が主体となる地区であるため、古代層まで達する大掛かりな発掘調査例は希少であろうが、安全面を配慮した上での調査者の問題意識が欠かせない。

現在、軒丸瓦は千葉地と千葉地東遺跡で各１点が出土している。ともに中世層から出土した小片で、後者は三重圏縁素弁六葉蓮華文とする復元案が示されるも［國平・河野 1988］、前者は今まで殆ど検討の俎上に上がることがなかった。蓮弁部分のみの破片で、報告書の拓影図は不鮮明だが、写真を見ると弁端の切れ込みが深く、後者よりもシャープな素弁蓮華文と見なすことができる。前述したように、先ずは実物同士を突き合わせて検討することが喫緊の課題である。

軒平瓦についても、三重弧文の小片が数点ほど出土しているのが現状であり、詳細な検討はやはり実見による比較を待たねばならない。

平瓦で、千葉地分類の凸面平行条タタキｃ類は綾杉文タタキとも称され、産地不明品として具体的な言及はなされてこなかったが、神奈川県下では「千葉地廃寺」にほぼ限られた資料であり、一枚作りであることから、創建期ではなく修復などにともなって生産・供給されたことが考えられる。近年、有軸綾杉文が河内国の古代寺院に特徴的なタタキ文様であることを髙橋香氏からご教示を得た。大県郡など、中河内において「極めて地域色の強い平瓦」と評価され［樋口 2007］、系譜など生産背景の追究にとって有益なヒントになることが期待される。

最後に、瓦以外の出土遺物について述べておく。「千葉地」一帯では、須恵器の浄瓶や木製の馬形代・絵馬などの出土が散見される。いずれも中世層からの出土で、浄瓶は古代の所産品と考えて良いが、木製品については中世に属する可能性も十分にある。ただ、馬形代については、木製形代類が数多く出土する中世鎌倉の都市遺跡においても類例が希少であることから、古代「千葉地廃寺」周辺における祭祀行為の一証跡と考えることは、完全には排除することが

できないだろう。また、盤や蓋を含む畿内系暗文土器の多さも律令制成立期における鎌倉地域を特徴付ける要素であり、郡衙や「千葉地廃寺」の造営期と重なる資料ゆえに、今まで以上に出土遺跡に即した詳細な検討が求められよう。

参考文献（刊行順）

沢寿郎編 1972『鎌倉―鎌倉史蹟めぐり会記録―』鎌倉文化研究会

千葉地遺跡発掘調査団 1982『千葉地遺跡』

神奈川県立埋蔵文化財センター1986『千葉地東遺跡』

國平健三・河野一也 1988「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅰ）―相模国鎌倉郡の古瓦を中心として―」『神奈川考古』第 24 号　神奈川考古同人会

鎌倉市教育委員会 1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』

鎌倉市教育委員会 1993『今小路西遺跡（御成小学校内）第５次発掘調査概報』

河野一也 1997「相模国の初期寺院」『関東の初期寺院　資料編』関東古瓦研究会

小林康幸 1997「古代瓦について」『由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書（第１分冊。古代編)』由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査団

岡本孝之編 2000「神奈川県古代瓦出土遺跡目録」『かながわの古代寺院』神奈川県考古学会

河野一也 2000「相模の古代寺院と瓦」『かながわの古代寺院』神奈川県考古学会

河野一也 2001「「かながわの古代寺院」研究の成果と課題」『かながわの古代寺院　研究の成果と課題』神奈川県考古学会

山中敏史 2005「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題―氏寺論の再検討―」『地方官衙と寺院―郡衙周辺寺院を中心として―』　奈良文化財研究所

原廣志ほか 2006「今小路西遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22（第１分冊)』鎌倉市教育委員会

樋口薫 2007「古代中河内と淡路島―瓦からみた交流―」『河内どんこう』No.82　やお文化協会

斉藤建設 2008『今小路西遺跡（No.201）発掘調査報告書』

國平健三ほか 2008『蛍光Ｘ線分析による相模国古代寺院瓦の生産地に関する研究』平成 17 年度～平成 18 年度科学研究補助金【基盤研究（Ｃ）（２）研究成果報告書

大上周三 2009「鎌倉郡衙と官衙関連遺構について」『神奈川考古』第 45 号　神奈川考古同人会

國平健三 2010「相模国における古代寺院の展開―宗元寺跡を中心として―」『神奈川地域史研究』第 27 号　神奈川地域史研究会

荒井秀規 2017「評家と白鳳寺院」佐藤　信編『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社

鈴木靖民 2018「古代愛甲郡の山寺と大壁建物へのアプローチ」『厚木市史たより』第 19 号　厚木市

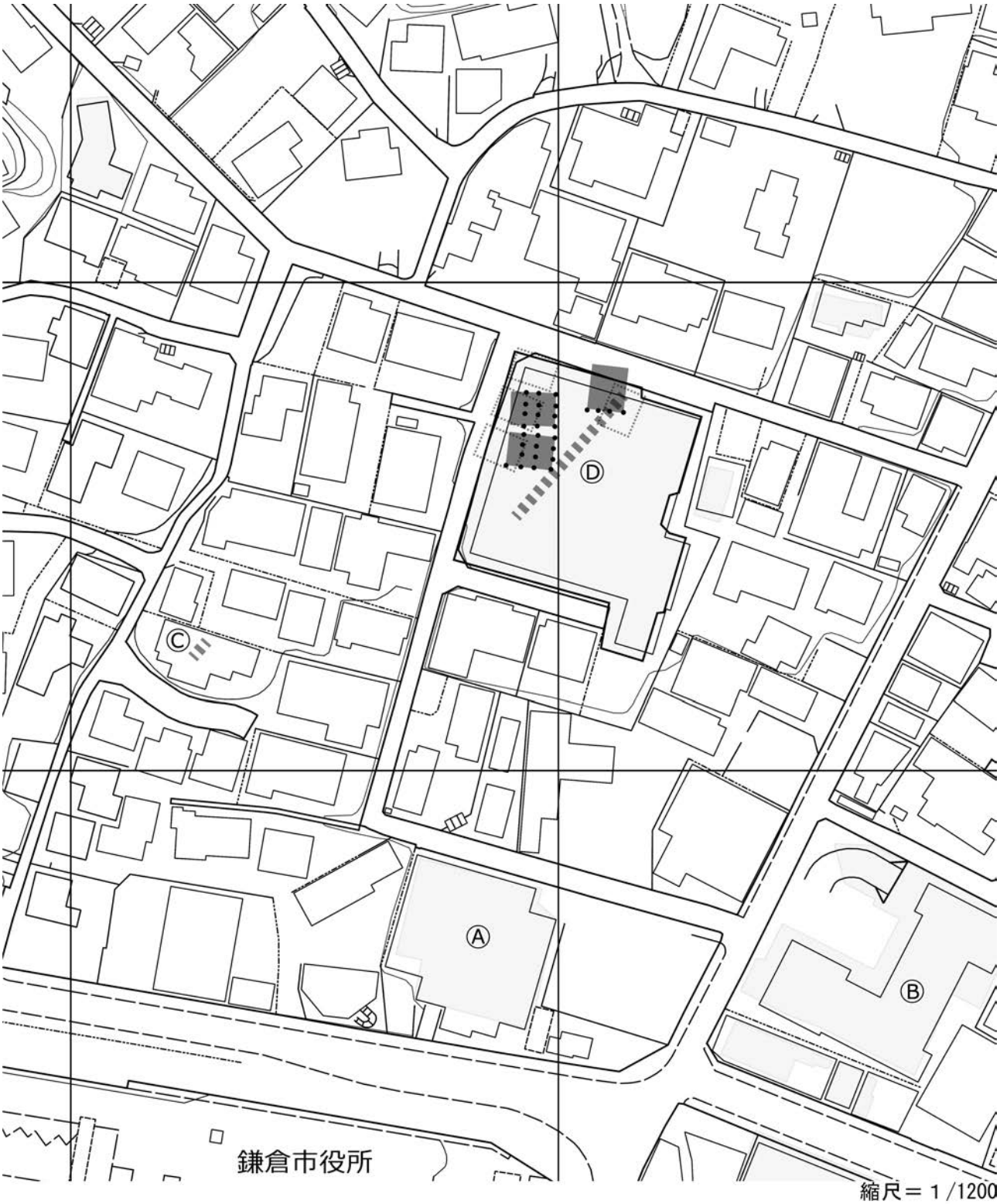
髙橋香 2019「地域の寺院と信仰のネットワーク」『愛甲の古代を探る』厚木市教育委員会』

押木弘己 2020「再考・今小路西遺跡の古代木簡」『調査研究紀要』鎌倉市教育委員会

三舟隆之 2020『古代氏族と地方寺院』同成社

大澤泉 2021「幻の古代寺院―千葉地廃寺―『頼朝以前～源頼朝はなぜ鎌倉を選んだか～』鎌倉歴史文化交流館

（文化財課　調査担当者）



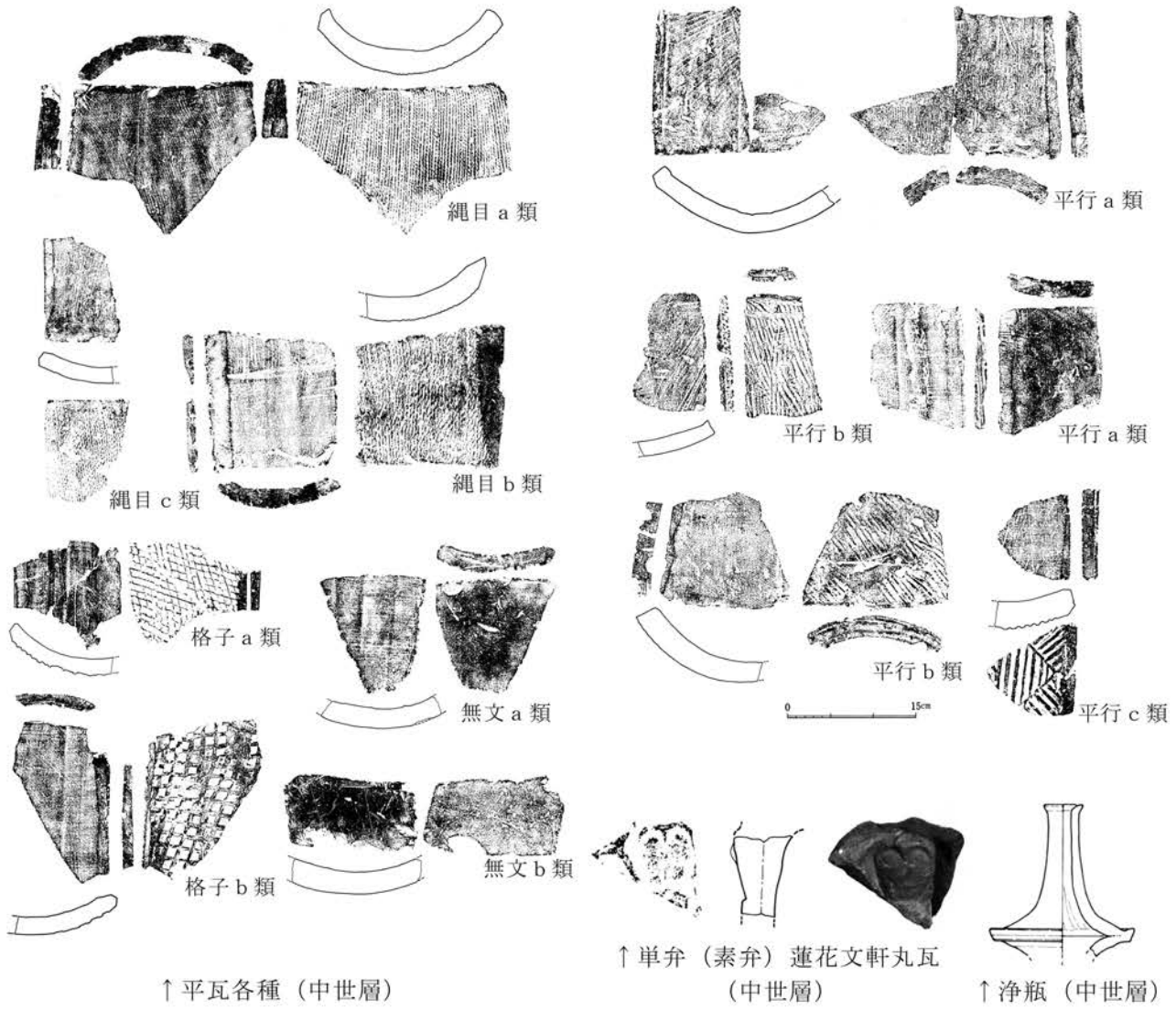
◆昭和 14 年（1939）、この一帯の分譲地で赤星直忠氏らが古代瓦を採集［沢編 1972］

◆Ⓒ地点の溝は当地点の遺構では最も古く、多量の瓦が出土、寺院創建後の８世紀代か［原ほか 2006］
　Ⓓ地点Ⅰ期の溝 12・13 とも近い軸線で、旧河川の名残か（図４参照）

◆Ⓓ地点の総柱建物はⅢ期（７世紀後葉～末）と報告［斉藤建設 2008］、寺院の正倉説も［大上 2009］

図１　「千葉地廃寺」周辺のおもな発掘調査地点

「千葉地遺跡」（図１－Ⓐ地点）［千葉地遺跡発掘調査団 1982］



「千葉地東遺跡」（図１－Ⓑ地点）［神奈川県立埋蔵文化財センター 1986］

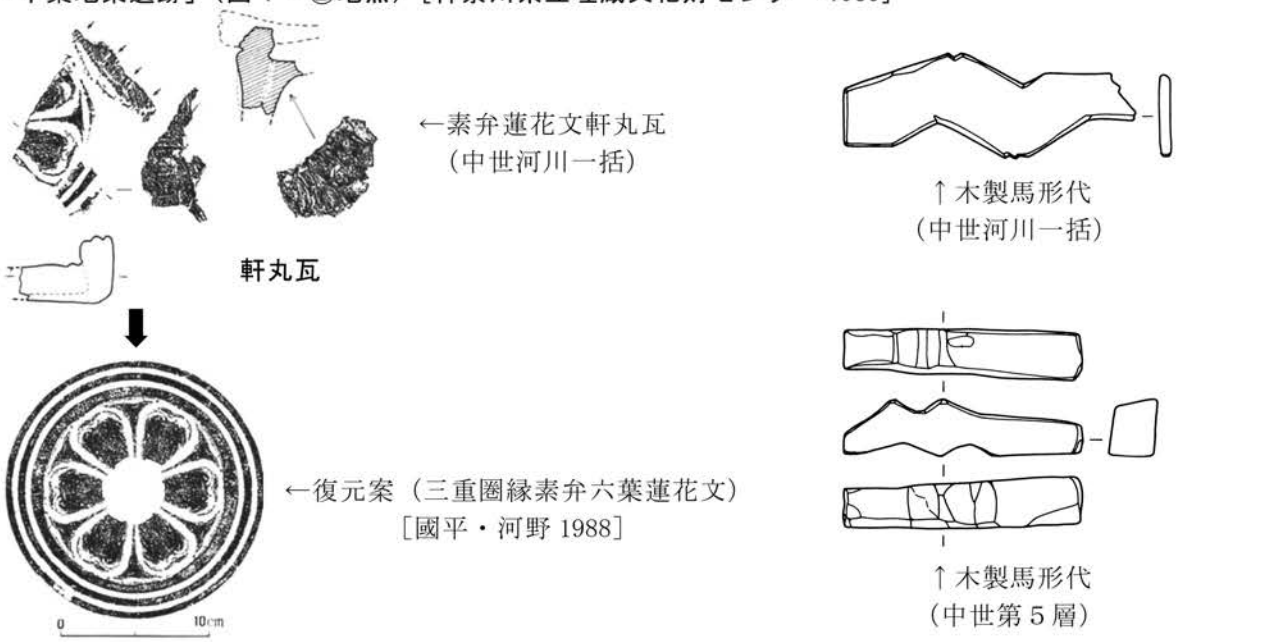
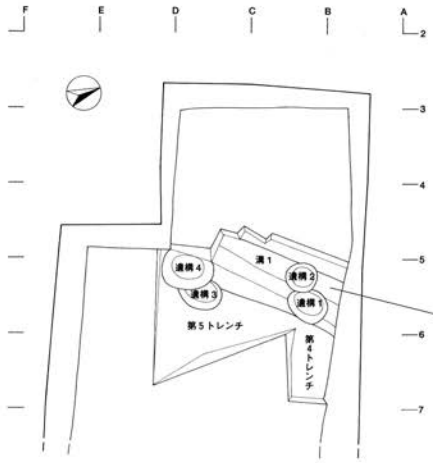
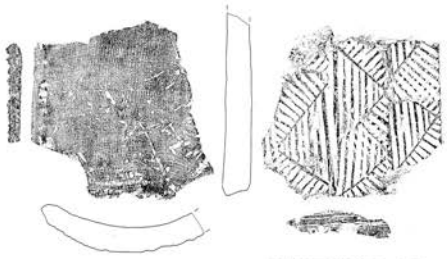


図２　「千葉地廃寺」関連の出土遺物（１）

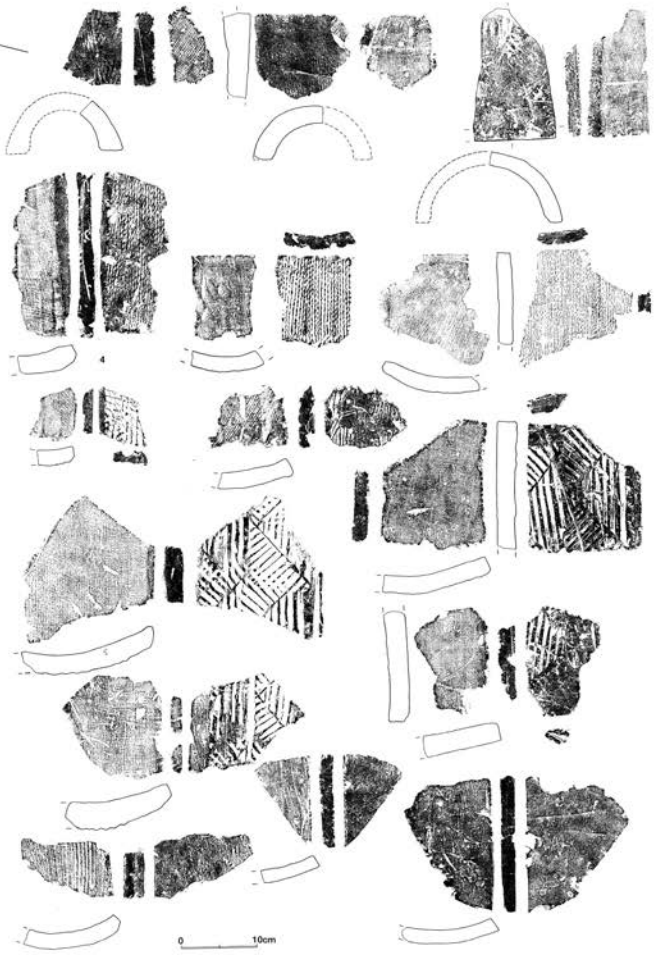
今小路西遺跡（図１－Ⓒ地点）［原ほか 2006］





↑凸面有軸綾杉文叩き平瓦（古代トレンチ）

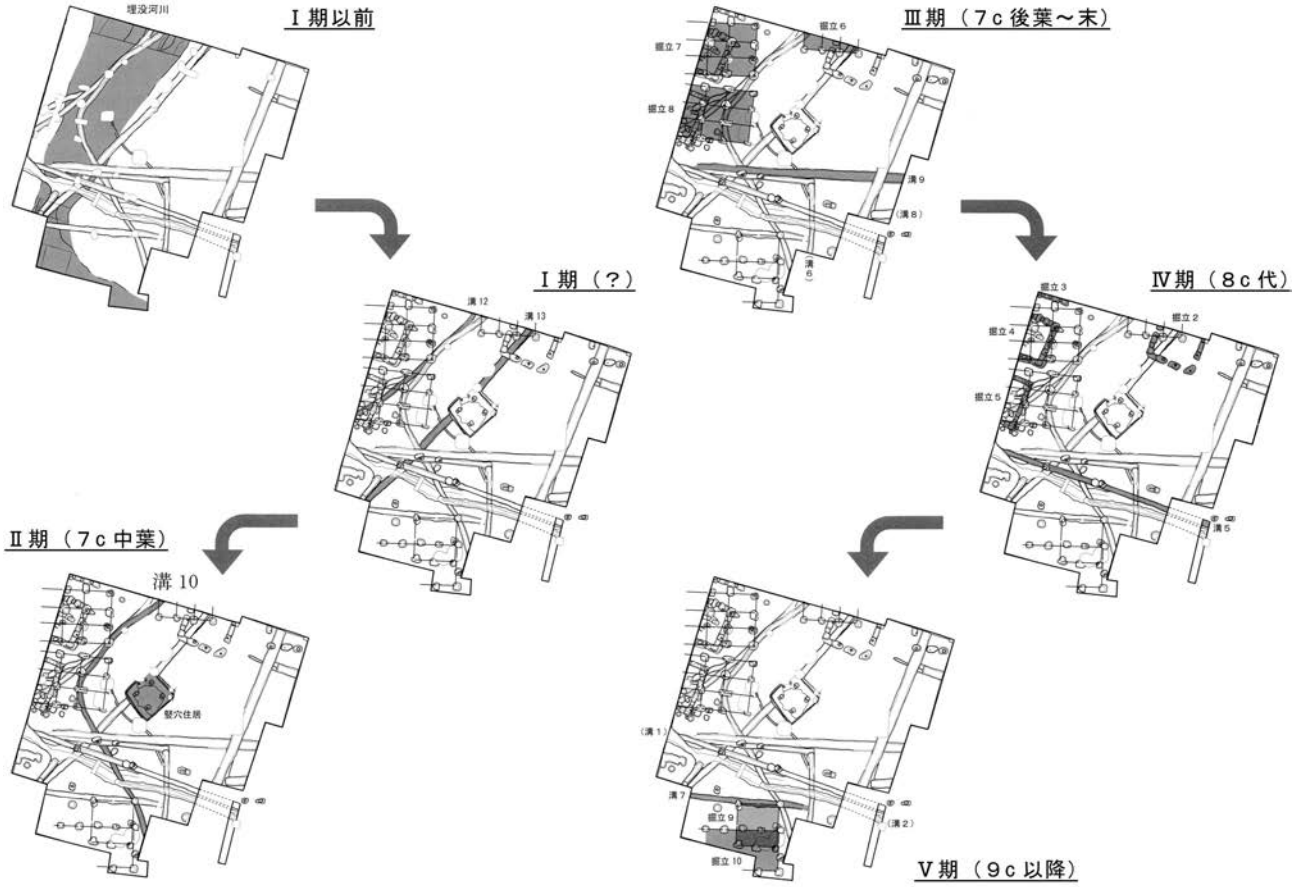
↑三重弧文軒平瓦（中世池遺構）



↑溝１（当地点で最も古い遺構）出土瓦

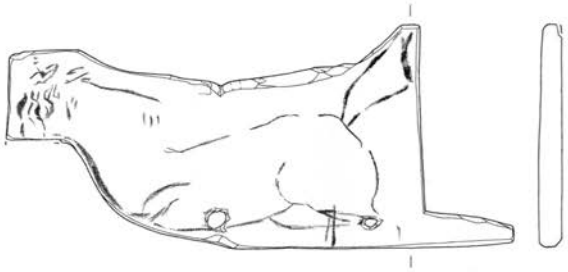
図３　「千葉地廃寺」関連の出土遺物（２）

今小路西遺跡（図１－Ⓓ地点）［斉藤建設 2008］

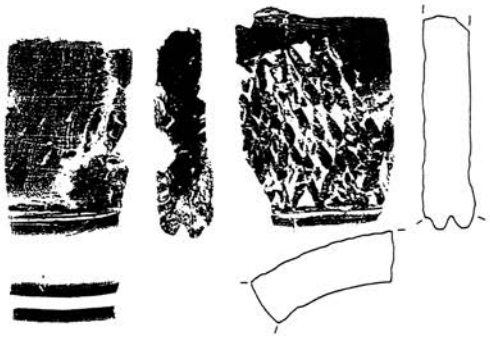


↑古代遺構群の変遷

瓦が出土するのはⅢ期以降の遺構・包含層と報文は述べるが、
Ⅱ期の溝 10 から出土した瓦も掲図されている



↑絵馬（中世第３面上包含層）



↑報告書非掲載の重弧文軒平瓦
［國平 2010 より転載］

図４　「千葉地廃寺」関連の検出遺構・出土遺物

付記

國平 2010 文献については、大部ゆえに内容を十分に把握できないまま成稿に至った。國平氏には非礼をお詫びするとともに、機会を改めて「千葉地廃寺」の研究史に位置付けることを目指したい。